

## 初年次教育におけるテュートリアル形式導入の試み

— 看護学部基礎科目「基礎ゼミナール」での実践 —

原田 信之\*

看護学部

(2010年11月17日受理)

看護学部基礎科目「基礎ゼミナール」は、近年注目されているテュートリアル形式の導入を試みた初年次教育科目である。初年次教育は、大学に入学したばかりの学生が大学生活をスムーズに送ることができるように手助けすることを目的としている。最初の3回のオリエンテーションで大学生としての主体的な学習方法を学ばせ、残りの12回の討論でテュートリアル形式を導入し、論理的なものの考え方や伝え方を学習させることを目指した。授業の目的と方法、討論テーマ選択傾向、レポートテーマ選択傾向、授業評価の結果、今後の課題などの記述を通し、初年次教育におけるテュートリアル形式導入の実践例を報告した。

(キーワード) 初年次教育, テュートリアル, 基礎科目, 討論, 教養教育

### はじめに

近年、初年次教育 (First Year Experience) の必要性が指摘され、多くの大学で様々な試みが行われている<sup>1)2)3)</sup>。初年次教育は、大学に入学したばかりの学生が大学生活をスムーズに送ることができるように手助けすることを目的としている。近年、大学の入試が多様化しているため、学生間の学力や意欲に大きなばらつきがあり、そのばらつきをどう解消するかが特に大きな課題となってきた。

2010 (平成22) 年4月に開学した新見公立大学は看護学部看護学科からなる公立大学である。新見公立大学看護学部看護学科の前身は、1980 (昭和55) 年に開学した公立の新見女子短期大学 (1999年に新見公立短期大学と校名変更) 看護学科で、開学以来30年間の伝統を踏まえて四年制大学に移行した。専門知識に加え、幅広い教養を持つ学生を育てることを目標としているため、開学準備の段階から、教養教育科目や初年次教育の充実をはかることを目指してカリキュラムを作成した。看護学部の初年次教育の中で、これまでの3年課程短期大学教育時代にはなかった新しい科目として開講したものの一つが、看護学部基礎科目「基礎ゼミナール」である。「基礎ゼミナール」では、近年注目されているテュートリアル形式の導入を試みた<sup>4)5)6)</sup>。本稿は、初年次教育におけるテュートリアル形式導入の試みについて、開学1年目での実践例を報告することを目的とする。

### 1. 授業の目的と方法

最初に、シラバスに記した内容から見てゆくことにしたい。授業科目名は「基礎ゼミナール」で、基礎分野・必修・1単位、学年配当は1年次、開講時期は前期、時間数は30時間、授業形態は演習、教員は看護学科教員全員が担当した。

授業目的は、「主体的かつ能動的に問題解決に挑戦する学習習慣を身につけることを目的とし、テュートリアル形式による学習方法を利用する。本ゼミナールを通じて、学生相互および学生と教員との交流を深め、コミュニケーション能力の向上を図る。」とした。最近の学生は、与えられた課題をこなすことは得意だが、主体的かつ能動的に問題解決に挑戦することは不得意な傾向があるため、それらを身につけさせるために、テュートリアル形式による学習方法を利用することにした。テュートリアル形式は、少人数のグループにチューターが同席し、学生が自主的に学習を行う授業形式である。必修科目のため、1年次生全員と看護学部教員全員が参加し、各グループ (6~7名) ごとに教員 (2~3名) が担当する複合ゼミ方式で行った。看護学部看護学科の2010年度入学生は64名であったため、1班あたり6名もしくは7名の10班とし、それぞれの班に固定の教員2~3名がチューター役として同席した。学生のグループ分けは出席番号順とし、教員は看護系と教養系の教員を組み合わせるようにした。

授業の概要は、「大学生としての主体的な学習方法を学ぶ。図書館の使い方、テキストの選び方、本の読み方、レ

\*連絡先: 原田信之 看護学部 新見公立大学 718-8585 新見市西方1263-2

ポートの書き方、医学中央雑誌や論文検索サイトなどを利用した文献の検索方法、教職員からの指導の受け方、学生同士のグループ討議方法、発表方法などをとおして、論理的なものの考え方や伝え方を学習する。1年次前期に、看護学科教員全員による少人数グループでのゼミ形式で、教員や学生同士の交流を深めながら、大学生としての自覚と学習意欲を高める。」とした。

成績評価の基準・方法・期日は、「学習態度、グループ討議への寄与の程度、出席率、レポート内容などから総合的に評価する。評価の総合判定は担当教員会議で行う。」とした。また、教科書等は「使用しない」とし、留意事項として「積極的な参加を期待する」ことと「複合ゼミ形式」とすることなどを記した。

授業計画は、全15回を大きく3部分に分け、第1～3回をオリエンテーション、第4～9回を基礎・教養系討論、第10～15回を専門系討論とした。具体的には、以下のよう

- 第1回：オリエンテーション(1)…テュートリアル形式の説明・授業目的・授業計画・学習方法等
- 第2回：オリエンテーション(2)…情報機器の使い方
- 第3回：オリエンテーション(3)…図書館の使い方
- 第4回：基礎・教養系討論(1)
- 第5回：基礎・教養系討論(2)
- 第6回：基礎・教養系討論(3)
- 第7回：基礎・教養系討論(4)
- 第8回：基礎・教養系討論(5)
- 第9回：基礎・教養系討論(6)
- 第10回：専門系討論(1)
- 第11回：専門系討論(2)
- 第12回：専門系討論(3)
- 第13回：専門系討論(4)
- 第14回：専門系討論(5)
- 第15回：専門系討論(6)

第1回オリエンテーションでは、テュートリアル形式の説明・授業目的・授業計画などについて2名の教員が講義を行い、さらに大学での学習方法について別の2名の教員がパワーポイント等を使用しながら講義を行った。第2回オリエンテーションでは、情報処理教室に教室を移し、情報機器の使い方について第1回とは別の2名の教員が講義を行った。第3回オリエンテーションでは、図書館に移動し、図書館の使い方や文献検索の方法などについて新見公立大学付属図書館の司書2名が講義を行った。第3回オリエンテーションの後半の時間は、各班ごとに分かれてもらい、班ごとに第4回から第15回まで各回のテーマ、各回の司会担当者1名、各回の報告者2名を決めてもらった。これらの3回のオリエンテーションを受講することにより、学生が大学の授業やこの授業そのものにスムーズに入っていけることを目指した。

なお、討論部分を基礎・教養系討論と専門系討論の2つに分けたのは、前半に身近なテーマを扱って討論にある程

度習熟してもらい、後半にある程度重いテーマを扱ってこれから学んで行くことになる専門科目に結びつくようにしたいという意図があったためである。教養科目の1つでもあることから、基礎・教養系討論についても充実させるように試みた。

第4回から第15回まで、全部で12回におよぶ討論をどのように進めていったかについて、簡単に説明しておくことにする。第3回オリエンテーションの後半の時間を使って、全12回のテーマ、各回の司会担当者1名、各回の報告者2名を決めたことはすでに述べたが、報告者は自分が担当する回までに図書館やインターネットを利用して報告の準備をする必要がある。学生に対して、報告者として報告する時にはあらかじめA4用紙1枚に報告内容をまとめ、当日に人数分(ゼミ生全員分と担当教員分)を印刷して持参するように指導した。最初はインターネットからの引用が多かったが、できるだけ参考文献を使用するように指導したところ、回を重ねるごとに改善されていったようである。

学生には、時間を厳守することや欠席や遅刻がないように指導したため、ほとんどの学生が無遅刻無欠席であった。教員側は、できるだけ楽しい雰囲気が保てるようにすることを共通認識とし、毎回の討論に参加した。

討論の時間では、毎回、最初に2名もしくは3名の報告者の報告(1人10分程度)を聞いた後、その報告内容をもとに、司会担当の学生1名が討論を仕切りながら、自由に討論する形をとった。最初はなかなか討論に参加できなかった学生も、回を重ねるごとに自分の意見を述べるできるようになったようである。

## II. 討論テーマ選択傾向

討論のテーマは、基礎ゼミナール担当予定の全教員から募集し、それらを内容から基礎・教養系討論テーマ(44題)と専門系討論テーマ(13題)の2群に分けた。「基礎・教養系討論」のテーマ候補44題に対して、「専門系討論」のテーマ候補が13題となったのは、あらかじめ教員から募集したテーマ候補をすべて候補とする方針にしていたことから、たまたまこのような比率になったためである(単純に基礎・教養系討論のテーマの方が多く集まったことによる)。テーマ候補一覧を印刷して学生に配布し、それを参考に各班ごとに討論テーマを決めてもらった。討論テーマを決める際、テーマ候補一覧に記したテーマ以外も認めることにした。

次に、最終的に学生が選んだテーマと採用数について、まとめておくことにしたい。採用数の多い順に列挙すると、次のようになる(丸括弧内に採用数を記した。テーマの冒頭に「・」印のあるものはリストに最初からあったテーマで、「\*」印のあるものは学生が追加採用したテーマ)。

### ◆「基礎・教養系討論」

- ・草食系男子と肉食系女子(8)
- ・赤ちゃんポスト(6)

- ・携帯電話（５）
- ・おひとりさま（５）
- ・DV（４）
- ・男らしさ、女らしさ（３）
- ・ストレス（３）
- ・自傷・自殺問題（３）
- ・派遣村（２）
- ・親友（２）
- ・海外支援・海外ボランティア（２）
- ・ネットカフェ難民（１）
- ・地球温暖化（１）
- ・少子高齢化（１）
- ・限界集落（１）
- ・観光地の条件（１）
- ・KY（空気読めない）（１）
- ・インターネット（１）
- ・大人と子ども（１）
- ・夫婦別姓（１）
- ・婚活・離活（１）
- ・ワーク・ライフ・バランス（１）
- \* 芸能界の薬物汚染（１）
- \* 理想の家庭（１）
- \* 排出権取引（１）
- \* 国際結婚（１）
- \* 郷土・地元（１）
- \* 夢（１）
- .....
- ◆ 「専門系討論」
- ・脳死（７）
- ・臓器移植（６）
- ・外国人看護師・介護士（６）
- ・医療ミス（６）
- ・遠隔医療（５）
- ・老老介護（５）
- ・献血（４）
- ・体と心（３）
- \* 再生医療（２）
- ・技能と技術・出生前診断（１）
- ・成長発達と老い（１）
- ・生命倫理（１）
- \* 脳死と臓器移植（１）
- \* 健康（１）
- \* 児童虐待（１）
- \* 献体（１）
- \* 地域医療（１）
- \* マザーテレサ（１）
- \* 感情労働（１）
- \* 長期入院する患児の孤独感の緩和（１）
- \* 医師不足（１）
- \* 理想の看護（１）

- \* ドクターヘリ（１）
- \* 認定看護師・専門看護師（１）
- \* 自閉症（１）

以上が、学生が選んだテーマである。「基礎・教養系討論」では、「草食系男子と肉食系女子」８件、「赤ちゃんポスト」６件、「携帯電話」５件、「おひとりさま」５件が多い。また、「専門系討論」では、「脳死」７件、「臓器移植」６件、「外国人看護師・介護士」６件、「医療ミス」６件、「遠隔医療」５件、「老老介護」５件が多い。これらを見ると、近年マスコミ等で注目されているテーマが多く採用されていることがうかがえる。

なお、あらかじめ教員側で用意していたテーマの中で、選択されなかったものは、以下のテーマである。

「基礎・教養系討論」……「格差社会（地域、経済、健康格差等々）」「年金問題」「監視社会・セキュリティ社会」「テロリズム」「環境保護とシーシェパード」「独居高齢者」「駅前商店街の衰退」「愛読書」「ことわざ」「人間の品格」「おもいやり」「親子」「家族」「男女共同参画社会・ジェンダー論」「セクシャリティ（男性と女性）」「自立と依存」「就職、仕事」「知ると伝える」「キャリア・アンカー（キャリア選択の際に最も大切な他に譲れない価値観や欲求）」「過労死」「いきがい」「英語（外国語）と日本語」「専門系討論」……「生命とは」「育つとは」。

選択されなかったこれらのテーマを見ると、「人間の品格」「おもいやり」「生命とは」「育つとは」などのように、漠然としていて話しにくい印象を持つものが比較的多いように思われる。

「基礎・教養系討論」では、「草食系男子と肉食系女子」などのような比較的身近で学生も興味を持ちそうな話題が多かったためか、学生の討論はかなり盛り上がった。「基礎・教養系討論」の時には、あちこちのグループから笑いや楽しそうな声がよく聞こえてきた。

前半の「基礎・教養系討論」で討論に慣れてきた頃、後半の「専門系討論」に入った。「専門系討論」では、「脳死」、「臓器移植」、「医療ミス」などのような比較的重いテーマが多かったため、前半のような盛り上がりはなかったが、時折話が途切れながらも深く討論しようとする姿がうかがえた。前半の「基礎・教養系討論」の後に、後半の「専門系討論」を行い、討論を深め、専門領域への意識を高めるという当初の目標は、かなり達成できたように見受けられた。

討論への参加程度や報告の内容などを元に、教員は討論部分の評価を行った。

### Ⅲ. レポートテーマ選択傾向

次に、レポートテーマ選択傾向について見てみることにする。全15回の講義が終わった後、全学生にレポートを課した。ワープロ横書きで、1枚の書式設定は40字×40字とし、分量はA4用紙で2枚とした（計3200字以内）。レポー

トのテーマは、討論12回の中から自由に選択させた。

学生たちがレポートのテーマとしてどのようなものを選択したか、テーマごとの選択数を見てみると、表1のようになった。なお、表1では、表の左欄に選択数を記し、右欄にテーマを記した（右欄のテーマに付した丸括弧内の数字は前節で見た討論採用数である。また、テーマの冒頭の「・」印はリストに最初からあったテーマで、「\*」印は学生が追加採用したテーマである）。

表1 レポートテーマと選択数

数	「基礎・教養系討論」 ( )内は討論採用数)
3	・赤ちゃんポスト (6)
2	・草食系男子と肉食系女子 (8)
2	・DV (4)
1	・おひとりさま (5)
1	・携帯電話 (5)
1	・自傷・自殺問題 (3)
1	・大人と子ども (1)
「専門系討論」	
9	・臓器移植 (6)
8	・脳死 (7)
6	* 脳死と臓器移植 (1)
5	・老老介護 (5)
5	・医療ミス (6)
4	・外国人看護師・介護士 (6)
2	・技能と技術・出生前診断 (1)
2	・献血 (4)
2	・遠隔医療 (5)
2	* ドクターヘリ (1)
2	* 自閉症 (1)
1	・生命倫理 (1)
1	* 健康 (1)
1	* 健康と運動 (1)
1	* 再生医療 (2)
1	* 医師不足 (1)
1	* 認定看護師・専門看護師 (1)

表1を見ると、「基礎・教養系討論」を元に執筆した数が11であるのに対し、「専門系討論」を元に執筆した数が53と、圧倒的に「専門系討論」の方が多くことがわかる。「専門系討論」の方が多くレポートテーマとして選択された理由としては、第1に「専門系討論」は後半で扱っていることから報告を準備したり討論した記憶がまだ鮮明に残っている時期にレポートを書いたこと、第2に「専門系討論」のテーマの方が参考資料が多いため比較的執筆しやすいこと、第3に看護学部の学生であるため「専門系討論」で扱った内容に元から関心が高かったこと、などが考えられる。

第2の資料の多寡の問題は、少なからずレポート選択に影響を与えたかと推定される。実際、「基礎・教養系討論」関係の参考文献を探そうとした場合、関連資料が少ないため、かなり苦勞することになる。討論の最初に行われる学生の報告を聞いていても、「基礎・教養系討論」の場合、参考文献を探すのにかなり苦勞している様子が見え、インターネットの情報に頼る学生が多かったようである。

レポートの内容は、構成・内容・参考文献・分析などがしっかりできているものから、単なる感想レベルのものまで、かなり個人差があった。それらレポートの内容についても、教員は評価を行った。

#### IV. 授業評価の結果

次に、授業評価の結果について見てみることにする。新見公立大学・短期大学では、各授業終了後、全科目について学生による授業評価アンケート調査を行っている。全16項目の質問事項について、「非常に当てはまる」から「まあまあ当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」の4段階で学生に評価をさせている。各段階に順に4点から1点までをつけて点数化し、各項目の平均点で表すと、表2のようになった。

基礎ゼミナールのアンケート回答率は9の質問事項が1名少なかったことを除けば、全員が回答した。全項目の評価平均点（総合点）は3.4であり、この教科に対して学生が高く評価していることが読み取れた。

低い評価点を示したのは、項目3の「あなたはこの授業で積極的に教員に質問・相談した」、項目10の「教科書その他の教材は適切であった」、項目11の「学生の理解力に配慮して、授業内容を解りやすくする工夫が感じられた」の3項目であった。今後は、評価点を高めるために、教員に質問しやすい環境を工夫することや、教材や資料を改善することが必要である。あわせて、学生の能力に合わせた内容、具体的には討論のテーマや討論の方式を工夫すべきであろう。

この授業評価アンケート調査とは別に、全講義終了後、学生に「基礎ゼミナールの感想」を自由記述で書いてもらった。質問項目は、「1 オリエンテーションについて（第1回～第3回）」、「2 ディスカッションについて（第4回～第15回。基礎・教養系討論、専門系討論）」、「3 ディスカッションのテーマについて」、「4 報告者（プレゼンター）について」、「5 全体の感想」の5つであった。以下、5つの項目それぞれについて、学生が書いた感想の一部を紹介する。

##### 1 「オリエンテーションについて」

- ・最初にいろいろな先生の話が聞けてよかった。
- ・何も分からなくて不安だらけだったけど、オリエンテーションを通していろいろ知れて、いい大学生活をスタートさせることができた。
- ・看護学部の先生方の熱意がひしひしと伝わってきた。

表2 学生による授業評価

	評価点	質問項目の内容
項目1	3.4	あなたはこの授業に集中していた。
項目2	3.3	あなたはこの授業の為に自己学習を十分行った。
項目3	2.8	あなたはこの授業で積極的に教員に質問・相談した。
項目4	3.4	あなたはこの授業の内容がよく理解できた。
項目5	3.6	あなたはこの授業を履修する事によって、この分野に興味・関心が深まった。
項目6	3.7	教員の声は明瞭で聞きやすかった。
項目7	3.3	黒板の字や図形は適当な大きさと、丁寧に書かれていた。
項目8	3.5	教室内が学習にふさわしい雰囲気には保たれていた。
項目9	3.6	教員は授業の開始、終業時刻を守っていた。
項目10	3.1	教科書その他の教材は適切であった。
項目11	3.2	学生の理解力に配慮して、授業内容を解りやすくする工夫が感じられた。
項目12	3.5	授業のねらいは明確であった。
項目13	3.6	学生の疑問・質問に答える機会が十分出会った。
項目14	3.6	教員に不公平な対応や差別的または学生を見下した発言等、授業に不適切な言動が無かった。
項目15	3.5	授業に対する教員の意欲・熱意が感じられた。
項目16	3.5	総合的に判断して、この授業に満足した。
総合点	3.4	

- ・レポートの書き方などを学べたのでとてもためになった。
- ・パソコンの使い方などしっかり指導されていたと思う。
- ・基礎ゼミナールを行う根本的な意味、重要性を理解し、自主的に積極的に参加することができた。
- ・勉強の仕方、授業の受け方も参考になった。
- ・学校が好きになった。
- ・何を目的としたオリエンテーションなのかよく分からなかった。
- ・頭が付いていかなかった。

## 2 「ディスカッションについて」

- ・最初はディスカッションのやり方も分からなかったが、だんだんみんなで討論できるようになった。
- ・視野や見方を広げることのできる意義のある討論になったと思う。
- ・他の人の意見が聞けてとても刺激になった。
- ・基礎テーマの時は、個人の意見や体験を楽しく聞けたし、新しいクラスメートと仲を深めるいいきっかけになった。専門テーマの時は、自分で思っていたことと調べたことが違っていたりして、正しく理解できるようになった。
- ・基礎教養系は語りやすかった。専門系は難しかったが知識が深まったので良かった。
- ・基礎教養系討論も深い討論ができていたので良かったと思う。専門系討論ではとても入り組んだ、とうてい解決しようのない問題にも触れられ、さらに興味を持つことができた。
- ・他人とその分野についてとことん話し合うことができ、とても有意義な時間を過ごせた。
- ・司会をするのが難しかった。

## 3 「ディスカッションのテーマについて」

- ・自分が興味を持てるテーマが多かったので楽しかった。
  - ・興味がなかったり重いテーマだったりすると、あまり盛り上がりなかった。
  - ・少し重いテーマを選びすぎていて発言が慎重になっていたが、重いテーマだからこそ真剣に話せた。
  - ・自分たちが選んだが、組み合わせによって重い話が続いてしまってきた時があった。
  - ・話しやすいものから話しにくいものまであったが、とても良かった。
  - ・初めの6回で話しやすさができたので、後の6回の少し重い内容でもきちんと話すことができた。
  - ・面白いテーマと医療に関するテーマとがあり、バランス良く感じた。
  - ・普段、友だちとは話さない内容なので新鮮だった。
  - ・基礎教養系の方が楽しかった。専門系の方はみんなそれぞれ思いがあって、意見が聞けて良かった。
  - ・何をしたらいいのか分からなかったもので、具体的に案を出してもらえたのは助かった。
  - ・自分の知識がついていかず、時間内で話を広げられなかった。
- 4 「報告者（プレゼンター）について」
- ・自分で調べてまとめてきたものを発表することで、プレゼンテーション能力が向上したように思う。
  - ・自分が報告者でない時も、報告者が調べた資料だけでは足りないもので、事前に調べたり資料を持ち込むことが必要だった。
  - ・みんなだんだん詳しく報告してくれたりして、分かりやすくて良かった。
  - ・資料の内容をそのまま言うだけなのは寂しいかなと思った。

- ・自分も含めてインターネットでの引用が多かったので、もっと本や新聞を使って報告書を書けば良かった。
- ・パソコンで作成することが無かったので不安だったが、四苦八苦しながら完成した時、達成感があった。パソコンのスキルも上がったと思う。
- ・みんなにどう分かりやすく説明するかを考えることで、発表力も少しついたかなと思う。
- ・発表することに慣れることができた。
- ・報告者による話題提供はとても大切であると思った。
- ・みんな良く調べていた。
- ・調べたことだけではなくて、わかりやすく言わなければならないのだと思った。
- ・もう1人も同じことを調べるが、内容が違うこともあって、2人で行うのはベスト。
- ・結構鋭い質問が来るので、十分に調べておく必要があった。
- ・やり方が難しかったので、報告のやり方を説明してほしかった。

#### 5 「全体の感想」

- ・皆が自分の意見をきちんと持っていて、それを相手に伝えることができるということに対して驚きを感じた。
- ・社会の問題について話し合いを行うという授業は新鮮で、自分の意見を言う練習にもなった。
- ・可能なら、メンバーを変えてみたり、先生を変えてみたりしてやってみたかった。自分のグループは女子ばかりだったので、男子の意見も聞いてみたかった。
- ・少しは成長できたかなと思う。
- ・自分の意見を話すのが嫌いだったが、話せるようになった。
- ・自分で調べる習慣がついたが、これは一生必要とされる能力だと思うので、大事にしていきたい。
- ・他人の考えを聞くことで、自分の中の考えが多様化し深まったと思う。
- ・この授業は本当に良いものだった。この授業がなかったら、自分の知識だけで、あまり知らないままできていることが多かったと思う。
- ・最初はディスカッションが苦痛だったが、回数を重ねる度にコツもつかめてきて、この授業が楽しみになった。
- ・基礎ゼミがあったので、パソコンが使えるようになった。
- ・他の授業より、全体的に楽しかった。
- ・コミュニケーション能力が高まったと思う。
- ・楽しかった。一番楽しみな授業だった。ずっと4年間やっていきたい。
- ・話す能力、聞く能力が伸びた。
- ・もっと基礎ゼミナールの授業数を増やしてほしい。
- ・もっと発展させる必要があると思う。

これらの感想から、学生がこの「基礎ゼミナール」という科目を楽しみながら受講し、自分の能力向上に役立ったと感じていることがうかがえる。このアンケートの自由記述から、表2の数値では読み取れない具体的な生の意見を

知ることができた。「もっと発展させる必要があると思う」などという感想もあり、今後も継続して行う必要のある授業内容改良作業の参考にしたい。

#### V. 今後の課題

「基礎ゼミナールの感想」から、多くの学生が、自分自身で調べて発表する力や、討論を通じたコミュニケーション能力が向上したと感じていることがうかがえた。また、後期の授業開始後、例年の1年より発表等の手際がよいという感想を複数の教員から聞くことができた。単なるゼミナールではなく、「チュートリアル形式」としたことで、多くの教育効果が得られたと判断される。

初年次教育という点からみると、基礎ゼミナールで培われた仲間集団の意味も重要であろう。大学入学後、仲間集団が形成できず大学から遠ざかってしまう学生も少なくないが、この基礎ゼミナールで仲間を手に入れることで、この仲間が大学生活の支えになるという効果もあるように思われる。また、入学後の半年間、固定した教員が担当して顔なじみになることで、教員に相談しやすくなるというメリットもあるように判じられる。

全講義終了後、担当教員全員が集まって成績判定会議を行った。その際、学習態度、グループ討論への寄与の程度、出席率、レポート内容などから総合的に評価し、さらに教員ごとの評価を学部全体で調整して最終評価を決定した。講義の総合評価としては、第1年目としては全体的に良い授業になったと判断して良いように思われる。

この科目をさらに良くするために、今後の課題を教員から提出してもらったところ、以下のような意見が得られた。

- ・グループ間での差があるように感じられ、指導力の向上の必要性も感じた。
- ・演習にはもう少しゆとりが必要ではないか。例えば、討議は隔週とし、討議と討議の間の時間は各自が情報収集などの自己学習に充てる、または、1つのテーマについて自己学習ののち討議を2回、つまり3回でセットになるような計画はどうか。
- ・1つ1つのテーマを深める時間が足りなかったように感じる。複数人で1つのテーマを追及し、プレゼンテーションする方法はどうか。
- ・いつも同じメンバー・教員ではなく、途中でシャッフルしてはどうか。
- ・プレゼンテーションだけでなく、レポートの書き方についてももう少し時間を使ってもいいのではないか。
- ・半分ずつ他グループによる観察を行ってはどうか。試みに行ってみると、緊張感があって引き締まった議論ができた。
- ・毎回違ったテーマでなくてもよいのではないか。
- ・全員に前もって学習したことを提出させるのはどうか。
- ・教員の発言が、各グループによって大きく異なる印象を受けた。教員は固定せず、いろいろなグループに参加し

てはどうか。

- ・討議に関する、基本的な知識やロールプレイをあらかじめする講義があってもよいのではないか。討議の1・2回を上級生にも参加してもらいモデルを示すことも取り入れてほしい。
- ・最後の1コマは全体のまとめに使ってはどうか。

このように、教員側からもさまざまな意見が提出されてきている。今後は、学生側の意見と教員側の意見を検討しながらさらなる改善を図り、よりよい内容になるように工夫して行きたい。

テュートリアル形式を利用した授業では、教員側の能力も問われるため、今後は教員1人1人が担当能力向上に向けて研鑽してゆくことが望まれる。また、テュートリアル形式を利用した看護学部ならではの授業についても研究を重ねてゆく必要がある。

## 文献

- 1) 山田礼子：初年次教育とは何か「生徒」から「学生」にするための方策，看護教育，50(5)，376-381，2009.
- 2) 菊池重雄：初年次教育の実際 玉川大学における具体的な展開，看護教育，50(5)，382-387，2009.
- 3) 大城凌子，新藤美樹，永田美和子他：看護大学における初年次教育 自己教育力育成の試みとしての教養演習，看護教育，50(5)，396-401，2009.
- 4) 吉田一郎，大西弘高編：実践PBLテュートリアルガイド，南山堂，2004.
- 5) 東京女子医科大学医学部テュートリアル委員会編：新版 テュートリアル教育，篠原出版新社，2009.
- 6) 森美智子，堺隆弘，畑尾正彦：日本赤十字武蔵野短期大学における8年間のPBLテュートリアル教育，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，20，1-13，2007.